

6. 短報

訂正

『外邦図研究ニューズレター』4号109頁「短報」の訂正記事、第3パラグラフ2行目にみられる「版面紙」(2カ所)はあやまりで、いずれも正しくは「印画紙」です。

『「地図」が語る日本の歴史：大東亜戦争終結前後の測量・地図史秘話』の刊行

外邦図研究会に参加されてきた菊池正浩氏が、『「地図」が語る日本の歴史：大東亜戦争終結前後の測量・地図史秘話』(暁印書館、2007年4月、1,800円)を刊行した。元大本営参謀、渡辺正氏の事績にはじまり、1940年にはじまる地図出版の統制についてもふれている。外邦図研究会の成果である『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』(2005年)に収録した渡辺正氏所蔵資料が、各所に引用されている。

『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』の刊行

第9回外邦図研究会で、「清末から日本統治初期の台湾に関する地図」を発表された魏徳文氏(南天書局：台北)らは、このほど植民地期の台湾における測量と地図作製に関する『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』(南天書局、2008年1月、全287頁、1,200元)を刊行した。共著者は高傳棋・林春吟・黄清琦の3氏で、魏氏はフォースト・オーサー。

台湾における近代地図作製は、台湾史への関心の高まりもあって重要テーマと考えられるようになっており、1999年には施添福氏(元台湾大学教授、現中央研究院台湾史研究所研究員)によるリプリントと解説の刊行(『臺灣堡図』1996年および『臺灣地形圖：日治時代二萬五千分之一』1999年、いずれも遠流出版公司)、国立台湾博物館での地図展の開催(2005年、図録として『地図台湾』を刊行)、『日治時期臺灣都市發展圖集』(黄武達編著、南天書局、2006年)の刊行などにより資料がそろってきている。また、『台湾鳥瞰図：一九三〇年代台湾地誌繪集』(遠流出版社、1996年)のような、吉田初三郎らのパノラマ図をあつめた書物もみられる。植民地期の台湾で作成された図は、多岐にわたっているが、いずれも外邦図研究に

とって重要な意義もっている。また魏氏は、南天書局の總經理として、台湾研究書(英文・和文もふくむ)の刊行のほか、古地図のリプリントも手がけ、台湾の地図研究の推進者として精力的に活動されており、今回の『測量臺灣：日治時期繪製臺灣相關地圖』の刊行はその一端である。

ウェブページ「外邦図研究プロジェクト」を公開中

「外邦図研究プロジェクト」のウェブページを公開しています。これまで刊行した『外邦図研究ニューズレター』1~4号、および、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集—』の全文をPDFファイルでご覧いただけます。ウェブページのURLは以下の通りです。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/>